

古文「係り結びの応用（省略・流れ・逆接）」100題ドリル | 無料PDFと解答付き 解答・解説編

【第1部】基本のおさらい+省略入門 (Q1~Q20)

- Q1. ▶ 答え：ア 係り結びを起こす係助詞はこの5つだけ。文中に見つけたら文末（結び）の活用形に注意する。
- Q2. ▶ 答え：イ 「ぞ・なむ・や・か」→連体形。「こそ」だけが已然形。
- Q3. ▶ 答え：ウ 「こそ」→已然形。5つの中で「こそ」だけ別扱い。最も間違えやすいポイント。
- Q4. ▶ 答え：エ 「ぞ・なむ・こそ」は強意。訳には出さなくてよいことが多い。
- Q5. ▶ 答え：イ 「や・か」は疑問（～か）または反語（～だろうか、いや～ない）。
- Q6. ▶ 答え：ア 「ぞ」を受けて、過去の助動詞「けり」が連体形「ける」で結ばれている。
- Q7. ▶ 答え：ウ 「こそ」の結びなので、形容詞「ものぐるほし」は已然形「ものぐるほしけれ」になる。
- Q8. ▶ 答え：イ 「なむ」があるため、文末の「けり」が連体形「ける」で結ばれている。
- Q9. ▶ 答え：エ 「こそ」→已然形。動詞「見ゆ」（ヤ行下二段）の已然形が「見ゆれ」。
- Q10. ▶ 答え：ウ 文中の係助詞に呼応して、文末の述語が特定の活用形で「結ばれる」。その語が「結び」。
- Q11. ▶ 答え：イ 係助詞があるのに、対応する結びの語そのものが文中に現れない現象。読み手が補って読む。
- Q12. ▶ 答え：ア 「いづくの山にや（あらむ）」＝「どこの山であろうか」。「にや」の下には「あらむ」を補うのが定石。
- Q13. ▶ 答え：イ 係助詞「や」の結びにあたるので連体形。「む」は終止形と連体形が同形。
- Q14. ▶ 答え：ウ 「～にや（あらむ）」の「に」は断定「なり」の連用形。「～であろうか」という意味になる。
- Q15. ▶ 答え：エ 結びの語が表に出ていない点から「省略」、結びが成立していない点から「消滅」とも呼ぶ。同じ現象。
- Q16. ▶ 答え：ア 「にや」の下の「あらむ」などは、当然補えるためにわざと省かれる。読み手が補う前提の表現。
- Q17. ▶ 答え：ウ 「なむ」が係助詞。「を+ば」は格助詞「を」+係助詞「は」の濁音化で、係り結びは起こさない。
- Q18. ▶ 答え：イ 「なむ」を受けて、過去の助動詞「けり」が連体形「ける」で結ばれている。
- Q19. ▶ 答え：ア 「とぞ（言ふ）」＝「～ということだ」。引用の「と」の下なので「言ふ」系の語を補う。
- Q20. ▶ 答え：ア 「と」は引用の格助詞。引用の下に省かれるのは「言ふ・聞く」など発言系の語と決まってくる。

【第2部】結びの省略 (Q21~Q50)

- Q21. ▶ 答え：ア 「にや（あらむ）」の型。係助詞「や」の結びとして連体形「あらむ」を補う。
- Q22. ▶ 答え：イ 「～にや（あらむ）」＝「～であろうか」。疑問の「や」のニュアンスを訳に出す。
- Q23. ▶ 答え：ウ 「なむ」→「ける」（連体形）と、結びがそろっている通常の係り結び。省略と区別できるように。
- Q24. ▶ 答え：イ 「にこそ」の下に補うのは已然形「あらめ」。「こそ」の結びは已然形だから。
- Q25. ▶ 答え：ア 補う語も係り結びの法則に従う。「や・か」なら連体形「あらむ」、「こそ」なら已然形「あらめ」。
- Q26. ▶ 答え：エ 「となむ（言ひ伝へたる）」の型。引用の「と」の下なので「言ふ」系を補う。

- Q27. ▶ 答え：イ 「とや（言ふ・聞く）」＝「～ということだろうか」「～とかいうことだ」。引用の「と」がポイント。
- Q28. ▶ 答え：ア 直前の語で決まる。断定「に」＋や→あらむ、引用「と」＋ぞ→言ふ。ここが省略攻略の核心。
- Q29. ▶ 答え：ウ 「もしや鬼であろうか」という疑問。「にやあらむ」は疑問が基本。
- Q30. ▶ 答え：エ 係助詞「や」の結びなので連体形。省略されずに「あらむ」まで書かれた完全形。
- Q31. ▶ 答え：イ 「ぞ・なむ・や・か・こそ」があるのに結びがない——その違和感が省略のサイン。
- Q32. ▶ 答え：エ 「にや（あらむ）」＝「～であろうか」。人物紹介でよく使われる形。
- Q33. ▶ 答え：ウ 「にか（あらむ）」の型。「や」と同じく「か」も結びは連体形「あらむ」。
- Q34. ▶ 答え：イ 疑問語「誰」＋「にか（あらむ）」＝「誰の～であろうか」。
- Q35. ▶ 答え：ウ 省略＝欠陥ではない。「～にや」「～にか」は補うことを前提とした定型として確立している。
- Q36. ▶ 答え：エ 「にこそ（あらめ）」＝「～であるのだろう」。「あらめ」（已然形）を補って訳す。
- Q37. ▶ 答え：ア 断定「に」＋疑問「や・か」＋推量「あらむ」＝「～であろうか」。
- Q38. ▶ 答え：イ 会話や心中表現では、言わなくても通じる部分が省かれやすい。
- Q39. ▶ 答え：ウ 会話の引用＋「となむ（言ひける）」。「なむ」の結びなので連体形「言ひける」を補う。
- Q40. ▶ 答え：エ 四段動詞「言ふ」は終止形と連体形が同形。ここは「ぞ」の結びなので連体形。
- Q41. ▶ 答え：ア 「とや（言ふ・聞く）」。物語の締めくくりの定型で、伝聞のぼかしを添える。
- Q42. ▶ 答え：イ 断定「なり」は体言・連体形に付く。「山にや」「契りにや」のように上が名詞になっていることを確認。
- Q43. ▶ 答え：ウ 過去推量「けむ」は終止形と連体形が同形。ここは「や」の結びなので連体形。
- Q44. ▶ 答え：エ 四段「咲く」は終止形・連体形が同形。「や」の結びの連体形がきちんとあるので省略ではない。
- Q45. ▶ 答え：ア 「にこそ（あらめ）」の型。結びの語が現れていないので省略（消滅）。
- Q46. ▶ 答え：イ 「とぞ（言ふ）」＝「～ということだ」。伝聞のかたちで文を結ぶ。
- Q47. ▶ 答え：ウ 「にこそ」だけは「こそ」の結び＝已然形「あらめ」。「にや・にか」は連体形「あらむ」。
- Q48. ▶ 答え：ウ 「にや（あらむ）」＝「～であろうか」。夢かうつつかを疑う場面の定番表現。
- Q49. ▶ 答え：エ 「静かに」は形容動詞ナリ活用の連用形。「夢にや」の「に」は体言「夢」に付く断定「なり」の連用形。
- Q50. ▶ 答え：ア 断定「に」の下は「あり」系、引用「と」の下は「言ふ」系。第2部の総まとめ。

【第3部】結びの流れ・「こそ」の逆接・文中の疑問（Q51～Q80）

- Q51. ▶ 答え：イ 結びが文末まで貫徹せず、後続の節へ「流れて」いく現象。アは省略、ウは逆接用法。
- Q52. ▶ 答え：ウ 「ぞ」の結びは本来連体形「ける」。接続助詞「ど」が付いて「けれど」となり、結びが流れた。
- Q53. ▶ 答え：エ 「けれ（已然形）＋ど」。接続助詞「ど」が結びの完結をさまたげている。
- Q54. ▶ 答え：ア 「なむ」の結びになるはずの「言ふ」が「を聞いて」と後続に取り込まれ、文末まで完結していない。
- Q55. ▶ 答え：イ 結びの語が「無い」のが省略、「あるのに完結しない」のが流れ。判定の分かれ目。
- Q56. ▶ 答え：ウ 「なむ」の結びは連体形「ける」のはず。「ば」が付いて「ければ」となり流れた。

- Q57. ▶ 答え：ア 結びになるはずの語に接続助詞が付くと、文がそこで終われず流れる。
- Q58. ▶ 答え：エ 文中に「つつ」があっても、文末に結び「ける」（連体形）がそろっていれば流れではない。
- Q59. ▶ 答え：イ 結び「ける」に「を」が付いて文が後続へ続き、係り結びが完結していない＝流れ。
- Q60. ▶ 答え：ウ 流れ＝失敗ではない。接続助詞が続いた結果の自然な現象で、文意を最後まで追えばよい。
- Q61. ▶ 答え：ア Aは「ぞ→ける（連体形）」で完結。Bは「ければ」と接続助詞が付いて流れた。
- Q62. ▶ 答え：エ 流れを見つけたら「文がまだ続く」サイン。あわてず後続の節まで読み切る。
- Q63. ▶ 答え：イ 「こそ…已然形、」で文が続けば逆接になることが多い。「～は…だが」と訳す。
- Q64. ▶ 答え：ウ 「こそ＋已然形（あれ）」のあとに文が続き、逆接「～はあるけれども」となる有名な例。
- Q65. ▶ 答え：ア 「こそ」の結びなので変動詞「あり」の已然形「あれ」。命令形と同形だが、ここは結び。
- Q66. ▶ 答え：エ 「こそ＋已然形（たれ、）」で逆接。「さらに～ず」は「まったく～ない」。
- Q67. ▶ 答え：イ 連用形「泣き」に付く「たり」は完了（存続）。「こそ」の結びで已然形「たれ」。
- Q68. ▶ 答え：ウ 「こそ＋已然形（聞こゆれ、）」の逆接。前後の対比（声⇄姿）にも注目。
- Q69. ▶ 答え：ア 「こそ→已然形」は成立済み。その已然形のあとに別の節が続いて逆接の意味が生まれる。
- Q70. ▶ 答え：エ 「多い」だけで「必ず」ではない。自動的に逆接と決めつけず、文意を確認する。
- Q71. ▶ 答え：イ 已然形で文が終わってれば、後続の節がないので逆接ではない。「これこそ～だ」という強意。
- Q72. ▶ 答え：ウ 「こそ…已然形」で一度区切る習慣をつけると、続きの有無＝逆接かどうかが見える。
- Q73. ▶ 答え：エ 文中の「や」を受けて、過去の助動詞「き」が連体形「し」になっている（来し＝こし）。
- Q74. ▶ 答え：ア 「あなたが来たのか、私が行ったのか」という疑問。文中の「や・か」は疑問・反語。
- Q75. ▶ 答え：イ 「か」の結びなので、形容詞「近し」が連体形「近き」になっている。
- Q76. ▶ 答え：ウ 疑問語「いづれ」＋「か」＝疑問。「どの山が～か」と訳す。
- Q77. ▶ 答え：ア 疑問語「たれ」＋「か」の疑問文。結びは「ける」（連体形）。
- Q78. ▶ 答え：イ 「見るものだろうか、いや、そうではない」という反語。「やは・かは」は反語になりやすい。
- Q79. ▶ 答え：エ 反語は問いの形で強く否定する表現。「～だろうか、いや～ない」まで訳し切る。
- Q80. ▶ 答え：ウ 形だけでは決まらない。文脈で「答えを求めている＝疑問」「強い否定＝反語」を判断する。
- Q81. ▶ 答え：ウ 「もぞ」＝「～すると困る・～すると大変だ」という心配（懸念）を表す。
- Q82. ▶ 答え：ア 単なる強意ではなく「困る・大変だ」という心配の気持ちを添える。入試頻出。
- Q83. ▶ 答え：エ 「もこそ」＝「～すると困る」。誰かに聞かれては大変だ、という場面の言い方。
- Q84. ▶ 答え：イ 「ぞ」の結びなので連体形。四段「降る」は終止形と同形だが、係り結びとして連体形。
- Q85. ▶ 答え：ウ 「こそ」の結びなので已然形。「聞け」は命令形と同形だが、ここは命令ではない。
- Q86. ▶ 答え：ア 「もこそ＋已然形」＝懸念。「風が吹いては大変だ」という心配。
- Q87. ▶ 答え：エ 「ぞ・こそ」単独なら強意だが、「もぞ・もこそ」は懸念。ここで差がつく。
- Q88. ▶ 答え：イ 体言「花」に付き、文末が連体形「ける」で結ばれている＝係助詞の「なむ」。
- Q89. ▶ 答え：ウ 未然形「咲か」に付いて文末にある「なむ」は他への願望。「早く梅が咲いてほしい」。
- Q90. ▶ 答え：ア 連用形「散り」に付く「なむ」は「な＋む」の連語。強意＋推量で「きつと～だろう」。

- Q91. ▶ 答え：エ 体言・連用形など＝係助詞、未然形＝願望の終助詞、連用形＋文末推量＝な＋む。まず接続。
- Q92. ▶ 答え：イ 「にや（あらむ）」の型。結びの語が現れていない＝省略（消滅）。
- Q93. ▶ 答え：ウ 結びになるはずの「ける」に接続助詞「に」が付き、文が後続へ流れている。
- Q94. ▶ 答え：ア 「こそ」→完了「ぬ」の已然形「ぬれ」で結んだあと文が続く。「花は散ったが～」の逆接。
- Q95. ▶ 答え：エ 「もぞ＋連体形」＝懸念。第4部の総合でも「もぞ・もこそ」は要注意。
- Q96. ▶ 答え：ウ 入試の定番の問い方。「に」の正体（断定）と省略の指摘までセットで答えられるように。
- Q97. ▶ 答え：イ 已然形で正しく結ばれた上で文が続き、「～はあるけれども」と逆接になる。
- Q98. ▶ 答え：ア 引用「と」に付く係助詞。文末「ける」が連体形になっていることが決め手。
- Q99. ▶ 答え：エ 手順は「係助詞を探す→結びの活用形を確認する→原則どおりでなければ省略・流れ・逆接のどれかを判断する」。
- Q100. ▶ 答え：ウ 100題の総まとめ。4つの型の名前と意味を正しく結びつけられれば合格。